進化し続ける 八戸三社大祭

小林 力
（八戸市博物館 主査兼学芸員）

2月のえんぶりが終わると、山車小屋に明かりが灯る。それを見て市民は「今年もお祭りが始まるのだな」と思う。5月、山車小屋の扉が開くと、道行く人は題材に思い巡らせながら、製作風景を見やる。7月、消防団の屯所などでお囃子の練習が始まり、子どもたちの声と太鼓、笛の音色が街中に響き渡る。そのような日常が尊いものだったと、コロナ禍で再認識した市民や在京八戸出身者も多いだろう。

八戸三社大祭（以下、三社大祭）は、八戸市内に所在する龍神社、長者山新羅神社（以下、新羅神社）、神明宮の合同例祭にあわせて、8月1日から3日を中心に行われる祭礼行事で、三社の神幸行列に従い、27台の華やかな風流（ふりゅう）山車が市内を巡行する。

お通りの様子。旧市役所前を練り歩く下大工町附祭。
1958(昭和33)年9月1日・和井田登さん撮影・八戸市博物館所蔵

三社大祭は、風流山車の変遷過程を示し、青森県南東部と岩手県北部に八戸を中心とした山車祭礼文化圏を形成し、日本の山車祭りの地域的特色を示す事例として、2004（平成16）年に国の重要無形民俗文化財に指定された。

さらに2016（平成28）年、準備や練習をつうじて世代間の交流を促し、地域の結束力を高める役割を果たしてきたことなどが評価され、ユネスコ無形文化遺産に登録された。

そもそも三社大祭は、1721（享保6）年に、天候回復と豊作を祈願して、八戸藩を鎮護する法霊社（現龍神社）から長者山三社堂（現新羅神社）を御旅所として、神輿行列を渡御したのを始まりとする。明治時代に新羅神社と神明宮が加わり、現在の祭りの形になった。

当初は、神輿の前後に幡や笠鉾、山伏、獅子権現が加わる程度だったが、年を追うごとに出し物が増えていった。1747（延享4）年には町人による「出し」が登場し、当時の形態は分からないものの、その後の山車へと展開していったと考えられる。

江戸時代後期の山車は、主に有力町人が上方から取り寄せた人形を屋台に載せた「人形出し」だったが、明治に入ると次第にその数は減っていった。1887（明治20）年、前年に猛威を振るったコレラの終息を記念して、各町内から風流山車が初めて曳き出された。毎年趣向を変えて作られる風流山車は、各町内の競争心も手伝い隆盛を極めていった。

風流山車の特質上、形状や製法は時代とともに変化してきた。1958（昭和33）年の写真を見ると、台車に馬車を用い、名場面を独創的な構図でダイナミックに演出している。現在は複雑な背景と多数の人形によって、歌舞伎や昔話、郷土の歴史や風俗等を表現し、さらに動力仕掛けで人形や背景を昇降展開させ躍動感や場面の展開を強調させるものが主流で、大型のものは幅8メートル、高さ10メートルに達する。

三社大祭の特徴の一つに、山車製作のプロがいないことが挙げられる。町内の人のほかは、元々山車や物作りが好きで、山車組に参加している友人や同僚等を頼って参加し始める人が多い。

山車組では、毎年手間を惜しまず、いかに多く作り変えるかを重要視してきた。創意工夫を楽しみ、物作りや手作業にこだわる。作り変える行為に魅力を感じて集まってきた町外の人を積極的に受け入れ、風流山車の様式を維持してきた。人だけでなく物や技術、情報も外部から取り入れることで、技術革新を行い、表現方法を進化させてきたのである